

異色のノンフィクションの力作二編と僚紙の誕生

——長瀬隆『微笑の沈黙』、角圭子『鄭雨沢の妻』

小田切 秀雄

長瀬隆の『微笑の沈黙』（晩声社刊、B六判、三六四頁、三〇九〇円）は、中学二年の時に樺太で敗戦を迎え、それから一年半して引き上げてきた人物を主人公に、早大露文科に入り、原水禁運動に参加し、その運動の中で知った被爆女性と結婚する、そういうタイプの青年の、現代にいたる半世紀の人生の経過と思考・観念の経過とが描かれている。被爆女性と実際に結婚するという点になると、どういふことが生じてくるか、とくに中年期以降に乳癌・肝臓癌などに冒された結果、人工透析が必要になるのだが、それが原爆後遺症であるかどうかは病理学的には確実なことがいえぬ（夭折したこの夫婦の長男——つまり被爆二世だ——の心臓病の場合も同じ）というつらい問題が取り出され、しかも週二回、のち三回の人工透析につきそって行かねばならぬこと等々で、主人公は自分の書きものの仕事ができず、生活も苦しく、いらだって、病床の妻に「死ね!」としばしばどなりつけるようになり、妻は何も言わずに堪えている——夫婦間のこの地獄も執拗に描きだされる。なお、主人公が私淑していた早大露文科の松尾隆という実在した哲学者教授が、さまざまな面から描かれているのはお

もしろいが、戦前の『ドストエフスキー文献考』（木寺黎二という筆名で）の著者が、敗戦後もっぱらマルクス主義の啓蒙学者として活動するにいたっていること、その内的経過が必ずしも明らかでない、ということがあり、作者自身もそこはほり下げていない。——松尾隆が松山隆に、宮本顕治・百合子が宮本健一・由紀子に、吉田嘉清が西川清治に、というふうにするこしずつ変えて、しかしその時代の左派を知っている者にはすぐわかる、という半ばノンフィクションの自伝的な小説という面があると同時に、主人公がペレベルゼフ（作中ではペレヴァーロフとなっている）のドストエフスキー論を翻訳する、ということの意味合いをはっきりさせぬままに、この作品自体をドストエフスキー的な何かなぞらえることになっているのがよくわからない。一作品全体にわたってくりかえしやもたつきが多く読みづらいところもあったが、内容そのものの手ごたえの重さは否定しえないこの書のメリックである。

角圭子の『鄭雨沢のこと——「さよなら」も言えないで——』（サイマル出版会刊、B六判、二七〇頁、一七〇〇円）は、敗戦後の半世紀を、頭をもたげて生きぬ

いてきた一人の女性知識人の、自伝的ノンフィクション・ノベル（帯のことば）。戦後もないころロシア文学者として多少活動し、トルストイの評伝『愛と人生の苦悩の中から』等の書があり、小説や翻訳書をも出している彼女は、また当時盛況のソビエト研究者協会の事務局の中心の一人でもあった。鄭雨沢——韓国から亡命してきて、日共の朝鮮人幹部朴恩哲のもとでさかんな活動をはじめていた有能な革命家と、彼女は恋愛で結ばれる。しかしその時期は、朝鮮戦争をめぐる諸勢力衝突の時代にあたり、米軍による在日朝鮮人連盟（朝連・その後身が現在の総連）の解散、その活動家たちにたいする日本警察による追及等のことがあって、鄭は追われる身となる。鄭の妻として川崎の労働者街に住み、そこでの在日朝鮮人たちの生活にまじって暮らし、やがて鄭は去る。彼女は女盛りを二三年間ともにすごしたかれと離婚して、孤独な生活に入る。そして別れて一七、八年して、ある日なにげなく新聞を開いたら、帰国運動の先頭に立って活動していたかれが、「北朝鮮連幹部相次ぎ粛正」という見出しのもとに、「知識人らをスパイで逮捕、鄭雨沢（元中央外務部副部長）も」とあった。以上のような概略の経過が実名のノンフィクションで書かれているために、そういうものとしておもしろく、歴史の記録としても重い手ごたえがあり、つまりノンフィクションが生きているということだ。当時のことを知っている人は、

この本のどこかでなつかしい名前を見出すかもしれない。しかし同時に、この全体の経過を知識人としての眼・感覚でとらえているために、お嬢様育ちの彼女が、極貧の在日朝鮮民衆のなかで日々をすごすさいの見聞や経験の記述も、類の少ないものといつてよからう。それにしても、鄭が彼女に別れようといった経過から、一七、八年してかれが粛正されてしまうまでの、北朝鮮の政治体制について角が少しも立ち入ろうとしない、というのは、どういふわけか。——こういう点は惜しまれるが、全体としてはまったく注目にあたいする本で読みはじめたら終りまでやめられない本である。

『千年紀文学』の出版を慶賀する

批評新聞の僚紙『千年紀文学』第一号が出た。僚紙というのは、広い意味での文学的な傾向の近さと同時に編集人の小林孝吉のほか円谷真護・村松孝明・清水昭三・竹内泰宏・宇波彰らその名のしたしい人たちと、その名は知らなかったが読んでみて共感するところの多かった石坂義之助ら八名との、合計一四名が書いているので、「僚紙」といっていいと思ったのである。タブロイド、隔月刊、一二頁、創刊号は二月二八日、送料込みで年二〇〇〇円、千一六六東京都杉並区阿佐ヶ谷南一四七一—六株皓星社内、千年紀文学の会発行。

創刊号は円谷「大仏次郎と渡辺一夫の『敗戦日記』」を巻頭に、